

学生参画型FDの成立と変容

—岡山大学を事例として—

大学経営・政策コース 中 里 祐 紀

Student Participation in Faculty Development:
Its Establishment and Transformation at Okayama University

Yuki NAKAZATO

This study attempts to clarify the history behind the establishment and transformation of a student participation in Faculty development (FD), using Okayama University as a case study.

In this paper, the student participation in FD organization of Okayama University was considered as a public committee that is part of a national university, and disclosure of corporate documents was requested in order to analyze meeting data. This process made it possible to (1) collect information not publicly available, (2) understand the relationship with other campus organizations, and (3) obtain indicators for a continuous understanding beyond the annual report.

目 次

1. 本研究の目的と背景
2. 研究手法
3. 学生参画型FDの成立と変容
 - A 成立期
 - B 発展期
 - C 変容期
4. 本稿の成果と意義

1. 本研究の目的と背景

2000年代以降、文部省高等教育局から出された『大学における学生生活の充実方策について（報告）—学生の立場に立った大学づくりを目指して』等を踏まえ、「教員中心の大学」から「学生中心の大学」への視点の転換が求められる過程で、一部の大学において様々な形で大学運営に対する学生参画が試みられるようになった。その中でもFDに対する学生参画については一定の広がりを見せている。現在、医学系分野においては認証評価の観点からカリキュラム委員会への学生参画が求められており、中央教育審議会大学分科会（2021）においても学修者本位の教育への転換の観点から、大学運営における学生参画の定着が期待されている状況がある。

本稿で取り上げる岡山大学の学生参画型FDの取り

組みは、岡山大学以外の学生参画型FD組織の当事者やFD以外の分野においても日本の大学運営における学生参画の実態把握の観点から事例として参照されてきた。

岡山大学における学生参画型FDの取り組みを紹介したものとしては、岡山大学（2009）の他、橋本（2002；2015；2019）、山内他（2009）、天野（2012）、中里（2012；2013）等がある。

しかしながら、岡山大学の学生参画型FD組織は、全期間にわたり当事者として活動に携わった学生・教職員が存在せず、当事者による研究・記録は自身が当事者として活動に携わった期間を中心とした記述とならざるを得ないという側面がある。それゆえに、岡山大学の学生参画型FD組織が成立した2001年7月から活動終了までの期間を貫く通史的記述はこれまで行われていない。そのため、岡山大学の学生参画型FD組織がなぜこれほどの長期間に渡って活動を継続させることができたのか、またなぜ活動が終了するに至ったのかという根本的な問いが十分に検討されないまま事例として取り上げられてきた側面があることは否定できない。

本稿では、以上の問題意識に基づき、岡山大学の学生参画型FD組織の歴史的変遷を資料に即して明らかにする。学生参画型FDは岡山大学以外でも取り組まれているが、様々な要因から組織が消滅する大学も出

始めている。したがって、様々な環境の変化を乗り越えつつ約20年にわたり活動を継続させた岡山大学の学生参画型FDの歴史の変遷を明らかにすることは、後発の学生参画型FD組織がその活動を継続・発展させる上で不可欠な「先行事例に学ぶ」ことを可能にするという意義を持つのである。

2. 研究方法

本稿では、下記(1)~(4)の資料を用いて上記研究課題にアプローチする。

(1) 公開資料（岡山大学のホームページ等から収集できる情報）

(1)の例としては、岡山大学のホームページから得られる情報が挙げられる。学生参画型FD組織の活動情報に加えて、中期計画・年次計画等の記述を参照することで、大学側の学生参画型FDの位置づけなどを把握することができる。

(2) 当事者が残した記録（報告書等）

(2)の例としては、学生参画型FDが採択された特色GPの最終報告書である岡山大学(2009)が挙げられる。また、当事者は学生参画型FD成立期から大学教育関係の学会、フォーラム、著書、講演など様々な機会を通して岡山大学の学生参画型FDに関する情報を発信してきた。これらの資料からは、報告書には記載されない詳細な情報や当事者の思いなどを理解することができることから、本稿における分析の対象とする。

(3) 法人文書の開示請求により入手した資料

(3)は、独立行政法人等の保有する情報の公開に関する法律に基づいて実施した法人文書の開示請求で入手した①岡山大学の学生参画型FD組織、②学生参画型FD組織と密接な関係を有していたと考えられる全学のFD推進組織（FD委員会・FD専門委員会）、③学生参画型FD組織の上位組織である教育開発センターの運営委員会の会議資料を指す。本資料はA4換算で2000頁を超える分量を有しており、詳細な事実確認が可能となる。

(4) 当事者へのヒアリング調査

(4)は、岡山大学における学生参画型FDの成立・推進に重要な役割を果たした富山大学橋本勝名誉教授に対して2020年7月に行ったヒアリング調査、2010年度以降岡山大学の学生参画型FDの推進業務に携わってきた岡山大学全学教育・学生支援機構の和賀崇准教授に対して行った2020年8月に行ったヒアリング調査を指す。(3)だけでは十分な実態把握が難しい点の確認

や、当事者の思いなどの把握などを目的に実施した。

3. 学生参画型FDの成立と変容

本章では岡山大学の学生参画型FD組織の歴史の変遷について通史的記述と分析を行う。記述にあたり、時期区分と組織名の表記は、以下の通りとする。

(1) 時期区分について

本論文では学生参画型FD組織の変容について取り扱うにあたり①成立期、②発展期、③変容期と区分して検討を行う。具体的な時期については次の通りである。

①成立期

2001年7月における学生・教員FD検討会の成立から2004年度の学生・教職員教育改善委員会への発展的改組までの期間。

②発展期

学生・教職員教育改善委員会への発展的改組から2005年度に採択された特色GP採択期間の終了（2008年度）までの期間。

③変容期

特色GP採択期間終了から学生・教職員教育改善部会が廃止されるまで（2019年度）の期間

(2) 組織名の表記

岡山大学の学生参画型FD組織は、成立時の「学生・教員FD検討会」から「学生・教職員教育改善委員会」、「学生・教職員教育改善専門委員会」、「学生・教職員教育改善部会」と3度の名称変更が行われている。このため、いずれの名称の組織にも共通する内容を記述する場合は、「学生参画型FD組織」と表記する。全学FD推進組織についても、「FD委員会」と「FD専門委員会」の名称が存在するため、同様に「全学FD推進組織」と表記する。

A 成立期

(1) 学生・教員FD検討会の設置

岡山大学における学生参画型FDは、全学教務委員会委員長（景山詳弘農学部教授）を中心とした教員たちにより構想された。岡山大学では、1998年頃から学内の教育シンポジウムでの学生の参加が目立ち始めたことを受け、2000年4月には教育シンポジウムの企画者に学生を加える方向で検討が進められた。山内他(2009)によると、参加した学生からは、「一度きりのイベントではなく可能なら今後も継続して大学教育改善に学生目線で取り組んでみたい」、「それが可能な組

織のようなものの立ち上げを検討いただけないか」という意見が出されたが、これは学生の素直な要望であると同時に、学生参画型FD組織の立ち上げを目指す教員側が待っていた発言であった。

これを受けてFD専門委員会は、学生・教員FD検討会の設立に着手することになる。この点について、組織設立の動機や意義に加え、設置を進める大学教育開発センターFD専門委員会の考え方や思いがよくあらわれている資料「学生・教員FD検討会の設立について（第2次案）」¹⁾を基に、実態を把握することとしたい。

同資料によると検討会は「当大学のFDを推進する組織の一環として、学生の意見も反映させる場としての学生・教員FD検討会の設立を提案する」とされており、大学のFDの一環であることが明記されている。またこの組織の意義として「学生からの意見が、一過性のものではなく、論理性を持った建設的な意見として形成され、提案されるようになることを期待する」と述べられており、この記述からは学生の意見をアンケート等で聴取するだけで満足することなく、学生が恒常的に教育改善に参加できる場を確保しようとするFD専門委員会の姿勢を読み取ることができる。検討会で活動する学生委員は各学部からの推薦を想定したため、組織の設置にあたり学部から理解を得ることは組織の運営上不可欠であった。実際に検討にあたり学部教授会で複数回のヒアリングを行いつつ議論が行われている。学生・教員検討会の設立に向けて各学部に対して提示した第1次案に対して寄せられた主な意見と回答は次頁の表1の通りである²⁾。

第2次案においても表1の内容に関連した意見が一部の教員から出されるケースもあったが、資料からは設置に期待する意見が多数確認できる³⁾。FD専門委員会では学部へのヒアリング結果を踏まえ、第2次案の内容を一部修正した上で2001年4月26日の教育実施協議会、教育開発協議会合同会議に提出された⁴⁾。合同会議で設立が承認された後⁵⁾、会則の整備、学生・教員委員の選出等設立に向けた準備が行われ、2001年7月11日に第1回学生・教員FD検討会が開催された⁶⁾。これにより岡山大学における学生参画型FD組織の活動がスタートしたのである。

検討会設置当初の状況について初代学生委員として副委員長に就任した山内源氏は、山内他（2009）で、設置当初の学生・教員FD検討会は学長、副学長が出席、FD専門委員会の委員長の教員がFDについて説明する等しており、公的な性格が強かったと述べてい

る。また当初は学生の集まりが芳しくなかったようで、親しみやすい組織を目指してサークル的な要素を取り入れるなどの努力を行ったとも述べている。

活動資金は潤沢ではなかった。橋本（2015）によると、学生たちが集まって自由に活動できる部屋は学内に確保したものの、PCも印刷機もコピー用紙さえも事務局の余りものを使用し、学生の研修旅費も教職員のカンパであり、予算ゼロからのスタートであった。したがって、設置された学生・教員FD検討会は、組織を安定的に機能させる観点から早期に実績を上げることが求められたのである。

(2) 成立期の活動—授業評価アンケートとシラバスの改善を中心に—

成立期の学生・教員FD検討会は、①授業評価WG、②シラバスWG、③外国語教育WG、④新授業科目の企画・提言WG、⑤勉学環境WG、⑥Ⅱ部（夜間）WGが設置され、活動を行っていたが、その実態を授業評価アンケートの改善とシラバスの改善を中心に確認する。

授業評価アンケートの改善を担当した授業評価WGの学生委員5名は、第一回検討会開催の翌月8月1日・12日・27日にWGを開催し、授業評価アンケートの改善の方向性を検討する基礎資料として、委員ではない学生向けのアンケートを実施する準備を進めている⁷⁾。本アンケートの実施については9月18日の第二回検討会で協議・了承されているが⁸⁾、議事録からは検討会の場で設問の一部文言修正を行っていることが確認できることから、この段階でアンケートの原案は出来上がっていたと想定される。全体会で一部修正が行われたものの、各学部から選出された教員委員と授業評価WG以外に所属する学生委員から了承される水準のアンケートを短期間で作り上げた学生委員の活動は注目に値する。

このアンケートは10月18日の総合科目を主な対象として実施され、12月12日に開催された第4回検討会で集計結果が報告され⁹⁾、上位組織であるFD専門委員会に1月15日に報告されている¹⁰⁾。

本アンケートは授業評価アンケートのマークシート部分に関する設問が中心であったが、授業評価WGの検討の対象は自由記述部分にも及んだ。WGでは授業評価アンケートの自由記述を閲覧しその実態を把握する必要があるとして、学生・教員FD検討会から上位組織であるFD専門委員会に閲覧について諮られている¹¹⁾。当該授業担当教員と各教育グループの責任者以

表 1 学生・教員FD検討会の設立について (第1次案) に対して各学部から寄せられた意見についてのQ&A

意見	回答
Q 1. 任務を教養教育に限定すべきではないか。	当面は実質的に教養教育科目が主体となるとは思いますが、もともと教養教育と専門教育の間には密接な連関性があり、検討の開始時点で境界を引くことは得策でないと考えます。今後、学部間のバリアフリー化が進めば、それぞれが学部単位では対応できない問題も増えてくると思われます。
Q 2. この検討会の組織上の位置づけはどうなっているか。	この会は教育開発センターのFD専門委員会の下部組織とし、この会で出された提案や意見はFD専門委員会会で検討したうえでFDに反映させるようにしたいと考えています。
Q 3. 学生からの意見を全て採り入れることは難しいのではないか。	ご指摘のとおりで、学生からの意見は、検討会のほか、授業アンケート (大学全体で行うマークカード式アンケート、意見箱、学部で行う別種のアンケート)、学生と教員の個別相談など多様にぐみ上げる必要があることは言うまでもありません。[〇〇が困難だから設置しない]のではなく、困難を承知の上で「どういうことなら可能か」を探っていくほうが生産的であると考えます。
Q 4. [FD活動の中に学生も入れている]というポーズに終わってしまうのではないか。	<p>学生からの提起とその具体的対応を公開することによって、その危惧は実質的に解消されていくものと思われまふ。一般にFDの検討においては、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・PDS (plan→do→see) ではなくPDCAサイクル (plan→do→check→act) として行わなければならない。 ・seeが目的ではなく、actの部分をもつと意識すべきだ。ということが強調されており <p>「何が想起されたか」、「それはどのような議論されたか」、「議論の結果どのように対応することになったか」、「その対応策は成果をあげているか」というように、それぞれのステップを公開し、チェックをかけ、actに転じている努力が求められると考えます。</p>
Q 5. FDに関して学生の意見を聞くとは、教育者としての資質が問われるのではないか。	<p>大学教育全般にわたって学生からの意見を聞くことはきわめて重要です。学生からの基本的な提言を個別に検討していく中で、無責任な提言があれば逆に批判されますし、誤解があれば解消されます。結果的には精緻化された提言だけが残ることになると思われまふ。18才人口減少にともない、一部には「学生消費者主義 (大学は学生にサービスしなければならないという考え方)」ということも言われております。その是非については議論が分かれるところですが、少なくとも</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生に (知的) 満足度を与える努力。 ・カリキュラムには大学の公益性を示す社会的契約という側面があり、教員の学術的関心のみに展開するものではない。 <p>という視点から学生の声を聞いていくことは是非とも必要です。</p>
Q 6. FDに関して学生の代表性に問題があるのではないか。	世論調査のサンプルではありまふから、必ずしも無作為に抽出すべきものではありません。いっぽうに、システムの問題点は構成員の多数派の平均的な声として上がってくるとは限りまふ。むしろ、個別的な事例の中で表面化することが多いとも言えます。仮に学生全員に投票用紙を与えて委員を選出したとしても、その委員のもとに何一つ意見が寄せられなければならない形式的民主主義に終わってしまふます。学生からの提言等は、「どれだけ多くの学生が望んでいるものなのか」というようなポピュリズム迎合の視点ではなく、むしろ、「どれだけ必然性のある提言なのか」という質的評価の視点から検討を加える必要があると考えまふ。なお、選出される学生委員の最適な数については、全学で30名程度と考えていますが、なお検討が必要だと思ひまふ。

外の自由記述の閲覧については、規程上FD専門委員会のさらに上位組織である教育開発協議会と教育実施協議会の了承が必要であったため¹²⁾、FD専門委員会は閲覧を認めた場合に問題が生じないような具体策を検討した上で両協議会に諮った¹³⁾。しかしながら、教育開発協議会からは閲覧が認められられたものの教育実施協議会の了承を得ることができず¹⁴⁾、結局閲覧は許可されなかった¹⁵⁾。このエピソードからは、当時の学生・教員FD検討会は、学生参画型組織であることを理由に学内規程等で定められた諸手続きについて特例的な取り扱いがなされることはなかった一方、学生・教員FD検討会で活動する学生の希望が叶うよう上位組織であるFD専門委員会が必要なサポートや学内調整を行っていたことが読み取れる。

自由記述の閲覧は認められなかったものの、実施したアンケート結果がFD専門委員会に報告された後も、FD専門委員会の授業評価アンケートWGと学生・教員FD検討会の授業評価WGで定期的な会議を重ねつつ改善が進められた¹⁶⁾。また1月のFD専門委員会では集計結果を全学部の掲示板に結果を掲示することが確認されており¹⁷⁾、これは検討会の認知度向上にも役立ったと考えられる。

学生・教員FD検討会は、設置初年度にシラバスの改善も実現している。こちらは2001年9月11日付でFD専門委員会内のシラバスWGがFD専門委員会に提出した資料「14年度シラバス作成における今後の課題」の段階で「学生・教員FD検討会（シラバス検討WG）の意見の反映」が項目として挙げられており¹⁸⁾、学生・教員FD検討会側の資料である「シラバスWGの報告Ⅱ」からも学生・FD検討会の全体会を通過したシラバスWGの意見がFD専門委員会で検討され、実際のシラバスの改善に反映されていることが読み取れる¹⁹⁾。この資料ではシラバスに掲載するそれぞれの項目の配置を検討した結果が報告されているが、例えばシラバスの並び順を検討する際は、従来の講義番号順のシラバスから脱却し、時間割のたてやすさを第一に考えたことが述べられている。このような点はシラバスを実際に使用する学生の視点が現れた提案であると考えられる。

学生・教員FD検討会が、設置初年度で7月の第一回会議の開催から約半年という極めて短い期間でこれらの改善を実現できたのは、これらの課題がいずれも上位組織であるFD専門委員会の課題とリンクしていた点が重要な意味を持っている。授業評価アンケートの改善とシラバスの改善は、学生・教員FD検討会の授

業評価WGとシラバスWGが中心となって検討が行われていたが、上位組織であるFD専門委員会にも目的を同じくする授業評価アンケートWGとシラバスWGが設置され検討が行われていたことは学生の提案の早期実現にあたり重要な意味を持ったと考えられる。

ただし、学生委員は単に大学側が課題と認識している点についてのみ検討を行っていたわけではない。例えば橋本氏は、後に大学の準公式行事となった新入生対象の履修相談会について、1年生のガイダンスがなかなか学生視点で行われていない点に加えて、シラバスを改善したとしてもそれを新入生がきちんと活用できなければ宝の持ち腐れになるという問題意識を持った学生からの提案されたもので、教員の発想にはなかったとインタビューで述べている。この点からは、学生・教員FD検討会の学生委員は、大学側が課題と認識していた点について検討するだけでなく、既存のWGの枠内に収まらない提案や教員の想定を超えた視点からの提案を行っていたことが確認できる。

以上の実態を踏まえると、当時の学生・教員FD検討会は、教員側が既に課題と認識していた点を検討する場合も含めて学生の主体性が確保されていたことが窺える。FD専門委員会などの上位組織も学生参画型FD組織を過度に特別扱いしない一方で必要なサポートを行っていた。したがって、当時の学生・教員FD検討会は、組織構造上FD専門委員会の下部組織であったが、単なる「下請け」ではなかったのである。

(3) 学生・教職員教育改善委員会の成立—全学FD推進組織の下部組織から同格の組織へ—

学生・教員FD検討会は成立初年度から具体的な改善成果を上げながら成果を蓄積することとなる。2003年度の特徴GPの申請では不採択となったものの²⁰⁾、2004年度の年次計画では「学生・教員FD検討会の活動を拡充し、必要な支援体制を整備する」²¹⁾と明記され、2004年7月に岡山大学の学生参画型FD組織は、岡山大学の学生参画型FD組織は「学生・教員FD検討部会」から「学生・教職員教育改善委員会」へと発展的に改組された。

FD専門委員会において学生・教員FD検討会の改組が審議された際の資料によると、この改組による特筆すべき変化は次の2点である²²⁾。

第一に、改組された学生・教職員教育改善委員会は、FD専門委員会の下部組織ではなくFD専門委員会と同格の位置づけとされた点である。資料では、教育開発センターからの改組・改名要望理由として「FD専門

委員会の下部組織と位置づけられているにもかかわらず、親委員会の検討事項の範疇を越えた活動をしており、実績をあげているので、FD専門委員会と同格の位置づけに改組してはどうか」と述べられている。この変化は、大学側が学生参画型FDを今後さらに推進する方針が明確に示されたと評価できる。前身の学生・教員FD検討会をFD専門委員会の下部組織とした背景には、学生が提案する内容が未知数であることに基づく不安があったことは既に指摘したが、学内の一定数の構成員が抱いていた学生参画に対する漠然とした不安が解消に向かい、学生・教員FD検討会の実績が学内の構成員から広く評価されるようになったと考えられる。

第二に、組織の構成員に職員を加えた点である。資料では、学生・FD検討会からの提案として「学生・教員FD検討会の精神を発展的に解消し、検討会の精神（学生が委員長・WGリーダーを担い、大学の教育改善を考える）を継承しつつ、委員に職員を加えることにより、学生・教員・職員が、身分や職種に無関係に一委員として一同に介する定例的な新委員会の設立を提案する」と述べられている。この変化は、構成員に職員を加えることで検討に職員の視点が加わり、委員会の検討内容を事務的側面からもより実現可能なものとするができることが指摘できる。資料では「これまでの検討会の提案は、事務レベルでの具現化の可能性を判断できる情報不足のため、上部委員会等で、実現不能となったものも少なくない」と述べられており、職員を構成員として加えることでさらに検討内容の質を向上させることが意図されていることが窺われる。

新たな委員会は「学生・教員・職員が、身分や職種に無関係に一委員として一同に介する定例的な新委員会」とされており、ここで想定されている職員は単なる陪席ではなく、正式な委員として学生・教員と対等な立場で議論に加わることが想定されていたことが窺われる。この点は、教職協働が現在ほど一般的ではなかった当時の状況を踏まえると画期的な変化であったと評価できる。その後学生・教職員教育改善委員会は、『新機軸「学生参画」による教育改善システム』として2005年度特色GPに採択され、さらなる発展を遂げることとなる。

B 発展期

(1) 学生参画型FDの全学的推進

2005年度に特色GPに採択された学生・教職員教育改善委員会は、同年度に学長に就任した千葉喬三学長の下でさらなる発展を遂げることとなる。千葉学長は学長就任前の副学長時代に特色GPのヒアリングを経験するなど、前身の学生・教員FD検討会の時期から学生参画型FDの推進に関わっており、学生参画型FDの意義や推進の必要性を就任前から認識していた。第一期中期計画においても、「学生を積極的にFDに参画させることを通じて、学ぶ者の視点を授業改善に取り込み、有効なFDを展開する」²³⁾とされ、大学として学生参画型FDが積極的に推進された時期であった。

特色GPに採択されたことで委員会の活動の幅は大きく広がった。学生参画型FDの活動自体は高額な予算を必要とする活動はそれほど多くはないが、ホームページの充実、新入生用ラーニングチップスの新入生全員配付、学生参画型FDを学内外にPRするための映像やリーフレットの作成など予算を必要とする活動の深化・発展を図る結果となったと評価できる。また特色GPの予算によって学生・教員FD検討会初代副委員長の山内源氏を特別契約職員として雇用できたことは、学生・参画型FD組織成立時の精神を受け継ぎつつ学生・教職員教育改善委員会としてさらなる発展を遂げる上で重要な意味を持ったと考えられる。この時期の活動については、岡山大学（2009）所収の年報に主な活動内容が整理されている。次頁の表2は、2005年度～2008年度の年報に記載された委員会の主な活動を整理したものである。

表2からは、委員会の活動として恒例行事として定着した取り組みと年度ごとに新たに企画される取り組みが併存していることが読み取れる。

また、2005年度にはWGの再編が行われ、学生交流WG、授業改善WG、システム改善WGに整理されている。これは学生・教員FD検討会で設置されていたシラバスWG、外国語教育WGなどと比べると抽象的なWG名となっている。このような現象が生じる理由について橋本氏は、学生の視点を活かしつつ改善を進めるうちに当面の課題がなくなったことから、将来再度集中的な検討を行う可能性を残しつつも、他の点についても検討できるような抽象的なWG名に再編されたと述べている。

この傾向をどのように評価できるであろうか。まず、当面の検討課題がなくなる点については、大学側が学生の提案を取り入れつつ真摯に教育改善に取り組

表2 特色GP採択期における学生・教職員教育改善委員会の主な活動

年度	活動内容
2005年度	(1) 新入生対象の履修相談会
	(2) 主題科目の抽選制に関する大規模なアンケートの実施とそれに基づく教員研修（桃太郎フォーラム）での改善提案
	(3) 第2回教育改善学生交流による新授業創作コンテスト
	(4) シラバスに関するアンケートの実施
	(5) 新入生用ランニングチップスの作成
2006年度	(1) 新入生対象の履修相談会
	(2) 教員研修（桃太郎フォーラム）への学生の積極的参画
	(3) 第3回教育改善学生交流（i*Sec2006）
	(4) 高校生も巻き込んだ新授業創作コンテスト
	(5) 大学全体の合同GPフォーラムの中での学生新企画「フリートーク」
	(6) 新入生用ランニングチップスの改訂
2007年度	(1) 新入生対象の履修相談会
	(2) 教員研修（桃太郎フォーラム）への学生の積極的な参加
	(3) 第4回教育改善学生交流（i*Sec2007）
	(4) 出張キャンパスライフ相談会（CLASS）
	(5) 本委員会の活動報告書の作成と配布（啓蒙活動）
	(6) 各学部における学生参画型FD活動の実態調査
	(7) 新入生用ランニングチップスの全面改訂
2008年度	(1) 新入生対象の学部別履修相談会の実施
	(2) 学生発案型授業の企画・開講
	(3) 教員研修（桃太郎フォーラム）での学生委員の発表
	(4) 第5回教育改善学生交流（i*Sec2008）の実施
	(5) 第1回岡山大学フリーディスカッション～そこまで言って委員会～の実施
	(6) 各学部における学生参画型FD活動の実施
	(7) 新入生用ランニングチップスの改訂

んだ結果であると評価することが可能である。一方で学生委員は、大学が認識している課題を考えるだけでなく、これまで以上に自ら課題を探すことが求められるようになったことが指摘できる。学生・教員FD検討会の時代にも学生委員自身が課題を見つけて提案を行う事例が確認されるが、大学側が課題と認識している点を検討する場合と比べて目に見える形で成果が出るまでに時間を要することが予想される。また、学生自身が課題を見つけるためには、大学の状況についてある程度の知識が必要となることも予想され、入学したばかりの1年生委員が大学の課題を発見して質の高い提案を行うためには、教職員からのサポートがこれまで以上に必要となることが予想されるが、表2からは毎年実施されている企画・イベントを実施するだけでなく、毎年新規の提案がなされ、実行されてい

ることが読み取れる。会議資料に含まれるWGの活動報告からは、学生委員が新規の課題がなかなか見つからず苦労していることが読み取れる箇所もあるが、委員会を運営する教員や専従の職員からのサポートを受けつつ試行錯誤しながら学生参画型FD活動に取り組む学生の姿を読み取ることができる。

(2) 発展期の活動—学生発案型授業を中心に—

学生発案型授業について岡山大学のホームページ²⁴⁾では、「学生参画型FD活動の一環として、学生による新授業の創作を行っています。具体的には、学生・教職員教育改善部会の学生委員が主体となり、学生の視点で新しい授業科目の提案からシラバス作成、成績評価の方法まで教員と一緒に授業を創作します。こうした学生発案型授業がこれまでに10科目以上開講されました」と述べられている。また学生による新授業の創作の意義としては、「教員にとっては「学生の目線」で授業をデザインすることができ、新たな授業改善のヒントを得る可能性があります。また、学生にとっては、学生のニーズに合致した魅力的な授業が開講されることはもちろん、それ以外に大学の講義がどのような教育効果を狙ってデザインされたものであるかを知ること、大学の講義に対する意識が変化する可能性があります」と述べられている。ホームページによると、2003年度から2019年度の間に14の学生発案型授業が開講されているが、本稿では、特色GP採択期間に創作された授業の中で、議事録以外の会議資料も入手済みで事実関係の詳細な把握が可能な2009年度開講の「知らなきゃばい、大人のマナー」の創作過程を資料に基づき明らかにする。

2009年度開講の学生発案型の新授業について初めて議事録等で確認ができるのは、2008年4月のことである。この段階では具体的な授業内容は決定しておらず、委員会が5つ程度の授業案を挙げて新授業創作に関するコンテスト（のちに投票兼アンケートに変更）を実施して学生の支持が高かったものを実際に授業として創作することが予定されていた²⁵⁾。投票兼アンケートは7月の全体会で実施することが審議決定され、投票期間は7月10日から24日の間とし、現在開講されている過去の学生発案型授業受講者に直接配付・回収することに加え、投票用紙と投票箱を一般教育棟A棟に設置することとされた²⁶⁾。アンケートで提示された授業案は、①『見上げてごらん、星空を』、②『知らなきゃばい・大人のマナー』、③『知ってるつもり？ ケータイ』、④『酒を知る』、⑤『レッツ☆株』で、授

業の概要と具体的な授業内容が記載されている。設問は受けた授業を選択することに加え、その授業の望ましい成績評価の方法等についても問われている。投票兼アンケートの結果、全261票中最多の112票を獲得した②『知らなきゃやばい・大人のマナー』の開講に向けた検討が行われることになった²⁷⁾。

開講を目指す授業の決定後、キャリア支援室所属の教員とコンタクトをとりつつ授業内容について検討を重ねた後²⁸⁾、9月下旬に教職員に対して授業担当者の公募を行っている²⁹⁾。注目すべきは、担当者の公募先を教職員とし、教員に限っていないことである。公募の結果、11名から返信がありそれ以外にも協力を申し出た者がいたが、その中には普段授業を行っている教員だけではなく、技術職員や事務職員からの申し出もあった³⁰⁾。

10月になると授業担当者の選定作業が本格化するが、ここでも選定を行うのは原則として学生委員である。成績評価等で責任を持つコーディネーター役の教員を、公募時に協力を申し出た教員の中から選定した後、授業改善WGの学生委員は協力を申し出た教職員と面会し、コーディネーター役の教員と相談しつつ授業の構成や内容についてさらに検討を行った³¹⁾。なお、完成版のシラバスでは担当者が「検討中」と記載されている1回を除く14回の授業を5名で担当することとされたが、この中には教員だけではなく先述の技術職員も5回分の担当者として加わっている³²⁾。シラバスの完成まで委員会内では、内容のブラッシュアップの観点から直前まで様々な議論が行われており、例えばシラバス提出締切2日前に開催された全体会で示された原案と実際に提出されたシラバスでは成績評価の方法が異なっている。全体会の原案では成績評価はレポート(70%)と出席点(30%)で行うと記載されているが³³⁾、全体会で「成績評価方法に実技試験を加えるべき」との意見が出され、実際に提出されたシラバスの成績評価方法は、実践テスト(30%)・筆記テスト(30%)・出席点(40%)に変更されている³⁴⁾。「マナーは知識の習得だけではなく、実践できなければならない」という観点からの意見であったと考えられるが、締切直前にもかかわらず学生委員は全体会の意見を踏まえて原案を修正の上期日までにシラバスを提出し、2009年度に予定通り開講された。

以上、岡山大学の学生発案型授業の検討過程について述べた。一連の検討過程から岡山大学における学生参画型FDの特徴を2点指摘しておきたい。

第一に、学生発案型授業の内容は、原案段階では学

生委員個人の興味関心から出発していたとしても、投票兼アンケートを行うなど学生委員以外の学生の意見を広く聴取する手続きをとっているという点である。この手続きにより学生委員は、自身の意見が委員以外の学生の意見と遊離したものではないかを確認するとともに、多数の学生の支持に裏付けられた内容であることを確認しつつ改善の提案を行うことができたと考えられる。

第二に、学生の提案に呼応する職員の存在である。学生発案型授業の担当者公募の際、教員以外の職員から授業を担当・協力しても良いという申し出があるという点は特徴的な点と評価できる。確かに今回取り上げた学生発案型授業はマナーがテーマであったことから、企業で社員教育に携わっていた経験を有する職員など、教員以外の職員側に適任者が存在する可能性があった。しかしながら、実際にその経験を有する職員が「授業を担当してもよい」と申し出て、実際に授業を担当することになったことは、学生委員の努力だけではなく、橋本氏がインタビューで述べた「よい取り組みは全学で取り組む」という岡山大学の文化が、教員だけではなく一部の職員にも浸透していたとも考えられる。

(3) 環境の変化への対応準備—特色GP採択期間終了後を見据えて—

特色GP採択期間中の恵まれた状況は永続的なものではない。学生参画型FDを積極的に推進した学長が任期満了で退任した後、新たに就任した学長が学生参画型FDを積極的に推進するとは限らないし、特色GPの予算についても採択期間終了後も学内で同規模の予算措置を期待することは難しい。この点について、当事者はどのような準備を行っていたのであろうか。

インタビューで橋本氏は、当時取り組んだ点として次の2点を挙げている。第一は、活動を積極的に推進した担当者が交代した後も組織が継続するための体制づくりである。各学部から学生委員を推薦してもらう公的な委員会としての体制がしっかりしていれば学長や運営する教員が交代しても大きな変化が生じることなく継続していくことが想定されていた。

第二は、大学の方針として学生参画を盛り込む努力である。岡山大学作成の『ティーチングティップス』において「岡山大学の考えるFD」として次のような記述がみられる。

FDは本来、教員一人一人がどのように授業改善

するかに主眼があるのではなく、あくまで教育組織として、全体としての教育をどう改善し、発展させていくかという観点が重要である。

本学では、この点で大学という知的共同体の構成員全体が、しっかり関わらなければ教育改善の実効性は上がらないと考えている。教員と職員の連携ももちろん重要であるが、教育サービスの受容者である学生たちが、この問題と真剣に向き合ってこそ、よりよい教育がなされるのである³⁵⁾。

この方針は学長が交代した際もそのまま受け継がれていた。また、公的な委員会ということを含めて全面的に打ち出すことで、大学がエビデンスとして残しやすい体制を意識した点、自身が担当でなくなった場合でも組織が継続できるよう後継者の育成に取り組んだ点、通常の予算に加えて学内の競争的資金を獲得する努力などの取り組みが橋本氏へのヒアリングから明らかになった。これらの環境の変化への対応に向けた準備は、岡山大学の学生参画型FD組織の継続に一定の効果があつたと評価できると考えられる。

C 変容期

(1) 学生参画型FDの成果検証の動きと組織の変化

2009年度以降、岡山大学の学生参画型FDを取り巻く環境は、特色GP採択期間が2008年度に終了し、2010年度には学生参画型FDを推進した学長が任期満了となったことに加え、岡山大学の学生参画型FDを成立から一貫して推進してきた橋本勝氏が富山大学に転出する等、大きな変化が生じている。また、後任の森田学長の下では、年次計画で学生参画型FDの効果検証に関する記載が複数回確認できるなど、学生参画型FD組織に対して目に見える成果を示すことが求められる傾向が以前より強まった時期でもあつた。

岡山大学の学生参画型FD組織は、2010年度途中から名称が「学生・教職員教育改善委員会」から「学生・教職員教育改善専門委員会」と変更されているが、この名称変更は「学生・教員FD検討会」が「学生・教職員教育改善委員会」へと名称変更された時のような組織の構成員や権限について大きな変化は生じていない。FD委員会（「FD専門委員会」から名称変更）でも学生・教職員専門委員会との今後の関係について質問がなされているが、引き続き連携しつつ活動していくことが確認されている³⁶⁾。

その後、岡山大学の学生参画型FD組織は2016年10月に「学生・教職員教育改善専門委員会」から「学生・

教職員教育改善部会」へと再度名称変更がなされている。これは上位組織である教育開発センターが改組されたことに伴う改組であり、従来の委員会からのミッションとメンバーをそのまま引き継ぎ活動することが確認されている³⁷⁾。ただし、この改組では学生・教職員教育改善部会はFD専門委員会の下部組織として位置付けられており、組織図上は同格ではなくなっている。

変容期の主な活動としては、履修相談会の実施、教育改善学生交流(i*See)の開催、新授業の創作などの活動が引き続き行われていることに加え、大学祭でのアンケートの実施、ティーチング・アワード表彰に係る先進教育賞候補科目の推薦などの新たな活動が行われていることも確認できる。

(2) 学部推薦制の維持の難しさ

このように岡山大学の学生参画型FD組織は、学長の交代や成立期から長年組織をけん引してきた教員の転出、特色GP期間終了による予算規模の変化などの環境の変化を乗り越えつつ活動を継続していくのであるが、問題点がなかったわけではない。特に学生参画型FD組織を公的な委員会として位置づける上で重要な役割を果たしていたはずの、学部推薦の制度の維持が厳しくなっていた。

この点を含めて2018年7月から10月まで約3か月にわたって学部への意見聴取を含めて今後の部会の在り方について各部局を巻き込んだ全学的な検討が行われており、当時の部会の抱えていた問題点を窺い知ることができる。

2018年度第4回FD専門委員会で「学生・教職員教育改善部会の在り方について」という議題が協議されている。その際の会議資料である「学生・教職員教育改善部会の在り方について（案）」³⁸⁾を基に状況を確認する。

資料によると「1.改善理由」では今回部会の在り方を検討するに至った経緯として「現行の学生推薦制度の維持は極めて困難であるとの強い指摘があることから平成31年度からの部会の在り方を検討したい」と述べられている。具体例として「今年度も1学部より学生の推薦が難しいとの連絡があつた」と述べられており「今年度も」と述べられていることから、学生の推薦が難しいとの学部からの申し出は2018年度に限ったことではないことが読み取れる。

この状況を踏まえた改善案としては、以下の3案が提示されている。

案1 現行どおり学部からの学生委員の推薦は必須とするが、条件を緩和する。具体的には委員の任期を1年に短縮し、学年も問わない（現在は、任期2年・原則1年生との条件）。翌年度も継続できる学生がいれば、継続してもらう。

案2 原則として、希望者のみで活動することとする。学部への学生委員の推薦依頼は行いが、推薦を必須にはしない。ただし、学部での委員募集活動等にご協力願う。

案3 部会を廃止する。代わりに、年数回程度、学長・理事等と学生との懇談会等を実施し、学生の意見を聴取し、対話する機会とする。各学部から学生代表者については既存の制度も活用しつつ、推薦してもらう。

その後各学部の状況把握や意見聴取が行われているが、全学教育・学生支援機構副機構長から「当部会は学外からも高く評価されており、学生にとっても成長に繋がり、良い経験となるため、存続する方向で検討いただきたい」旨の依頼がなされたこともあってか、結果的には案1～案3のいずれかを選択することはされず、今後も学生参画型FDを学内に広めていく方針で部会を運営することが確認されている³⁹⁾。

その後も部会を活性化させるための施策が検討され、当事者により様々な取り組みがなされたものの、最終的には2019年度をもって学生・教職員教育改善部会は廃止されることとなったのである。

(3) 学生・教職員教育改善部会の廃止と新たな学生参画型FDの模索

学生・教職員教育改善部会の廃止は2020年1月の全学教育推進委員会の組織体制の見直しの過程で決定されている。会議資料「全学教育推進委員会体制の見直し案」⁴⁰⁾によると、見直しのポイントとして(1)協議・意思決定プロセスの明確化、(2)WGのミッションにおける再編成、(3)学生参画のあり方の見直しが挙げられており、学生参画型FDのあり方についても議論があったものと考えられる。この会議の議事録では「(部会を廃止することで) 学生の意見を吸い上げる仕組みはどうなるのか」との質問が委員からなされていることが確認できる。なおこの質問に対しては、具体的なことは今後検討を進めるとしつつ、「義務的に選出さ

れた学生委員を含む従来の部会よりも教育改善に意欲的な学生達と、(中略)、教育改善への学生参画を推進していきたい」との回答がなされている⁴¹⁾。

今後岡山大学の新たな学生参画のあり方が検討されることになるが、この回答を踏まえると岡山大学の新たな学生参画型FDは有志の学生による活動が中心となることが予想される。したがって、各学部から推薦された学生委員、教員委員、事務職員で構成され、岡山大学で約20年にわたって継続した公的な委員会形式の学生参画型FD組織は学生・教職員教育改善部会の廃止とともに終了することとなるのである。

4. 本稿の成果と意義

本稿では岡山大学の学生参画型FDの成立と変容について、学生・教員FD検討会の成立から特色GP採択期間を経て学生・教職員教育改善部会の廃止までの約20年間について歴史記述を行った。

本稿の意義について3点指摘しておきたい。

第一に、学生参画型FD組織の歴史の変遷を明らかにした点である。約20年にわたり活動を継続させた岡山大学の学生参画型FDの事例は、学生参画型FD・学生FDの実践者や学生参画に関心を持つ研究者によって参照されてきたが、担当者の活動期間を超えた連続的な歴史記述が十分になされておらず、実態把握の面から課題があった。本稿の分析はその課題を克服しようとする試みである。

第二に、学生参画型FD組織の活動について学生参画型FD組織以外の他の委員会や会議体の動きを含めて多面的に捉えつつその実態を明らかにした点である。本稿で取り上げた授業評価アンケートやシラバスの改善、学生発案型授業は、いずれも先行研究や当事者の報告、公開資料によってその成果を確認することはできるが、成果となる以前の検討過程については十分明らかにされていなかった。本稿の分析は、その実態を把握し個別の取り組みに関する理解を深めるのみならず、検討過程を通じた学生参画型FD組織周辺の動きを把握することで、大学として学生参画型FD組織がどのような存在として位置づけられていたかという問いを検討する観点からも有用な知見が得られた。

第三に、活動に携わった当事者以外の第三者による事例分析の可能性として、法人文書の開示請求を活用した内部文書の分析の意義を示した点である。本稿では開示請求により入手したA4換算で2000頁以上の資料を分析し、通史的記述を行ったが、法人文書の開

示請求は当事者に限らず全ての市民に請求資格がある。私立大学では同様の手法を採用することが難しいという一定の限界は存在するものの、当事者以外の第三者が公開資料とインタビューだけでは把握できない点まで踏み込んだ詳細な分析を行うための研究の方法として今後の発展が期待される。

現在、日本の大学における学生参画型FD組織は、新型コロナウイルスの影響もあり、厳しい状況となっているケースも散見される。本稿が「過去の歴史に学ぶ」という観点から、学生参画型FD組織の継続と発展の一助となれば、かつて学生参画型FD活動に携わった筆者としても望外の幸である。

謝辞・付記

本稿は、筆者が2021年1月に東京大学教育学研究科に提出した修士論文の一部を発展させたものである。

本稿の執筆にあたり、インタビュー調査にご協力いただいた富山大学名誉教授橋本勝氏、岡山大学全学教育・学生支援機構准教授和賀崇氏、大量の法人文書の開示請求にご対応いただいた岡山大学情報公開窓口の担当者様に記して感謝申し上げます。

なお、筆者は本稿の分析対象である岡山大学の学生参画型FD組織（学生・教職員教育改善委員会）に所属し、2009年度に委員長を務めた経験を有するが、本稿で使用・引用した会議資料等の内部資料は、全て法人文書の開示請求により入手した資料あるいは岡山大学（2009）所収の資料であることをお断りしておきたい。

注

- 1) 「学生・教員FD検討会の設立について（第2次案）」『平成13年度第1回FD専門委員会 会議資料』所収。
- 2) 前掲1資料。資料中に、第1次案に対して寄せられた主な意見とそれに対する回答が記載されている。
- 3) 『平成13年度第1回FD専門委員会 会議資料』に「学生・教員FD検討会の設立について（第2次案）」に対する各学部からのヒアリング結果が資料として所収されている。
- 4) 「平成13年度第1回FD専門委員会 議事メモ」『平成13年度第2回FD専門委員会 会議資料』所収。
- 5) 「平成13年度第2回FD専門委員会 議事メモ」『平成13年度第3回FD専門委員会 会議資料』所収。
- 6) 「平成13年度第1回学生・教員FD検討会進行次第」『平成13年度第4回FD専門委員会 会議資料』所収。
- 7) 「学生・教員FD検討会のワーキンググループ」「学生・教員FD検討会ワーキンググループ開催日程」『平成13年度第5回FD専門委員会 会議資料』所収。

- 8) 「平成13年度第2回学生・教員FD検討会 議事要旨」『平成13年度第6回FD専門委員会 会議資料』所収。
- 9) 「平成13年度第4回学生・教員FD検討会 議事要旨」『平成13年度第9回FD専門委員会 会議資料』所収。
- 10) 「平成13年度第9回FD専門委員会 議事メモ」『平成13年度第10回FD専門委員会 会議資料』所収。なお、資料では開催日が「平成11年1月15日」と表記されているが、議事の内容から「平成14年1月15日」の誤記と判断した。
- 11) 「平成13年度第7回FD専門委員会 議事メモ」『平成13年度第8回FD専門委員会 会議資料』所収。
- 12) 「学生による授業アンケートの実施について（第4次案）」『平成13年度第7回FD専門委員会 会議資料』所収。なお、この第4次案が最終案であることが資料に記載されている。
- 13) 前掲10資料。
- 14) 「第14回教育実施機構 議事要旨」『平成13年度第9回FD専門委員会 会議資料』所収。
- 15) 「平成13年度第8回FD専門委員会 議事メモ」によると、教育実施協議会では各学部への意見聴取を行い、意見聴取の方法の検討にあたり教育実施協議会座長、FD専門委員会委員長、授業評価アンケートWG座長、閲覧申請代表者等、教育開発センター長で会議を持つことが計画される等、閲覧の可否の判断にあたり慎重な検討が行われたことが窺われる。
- 16) 「平成13年度第10回FD専門委員会 議事メモ」『平成13年度第11回FD専門委員会 会議資料』所収。
- 17) 前掲9資料。
- 18) 「14年度シラバス作成における今後の課題」『平成13年度第5回FD専門委員会 会議資料』所収。
- 19) 「シラバスWGの報告Ⅱ」『平成13年度第7回FD専門委員会 会議資料』所収。
- 20) 不採択時のヒアリングのエピソードとして、千葉（2006）は「複数の先生からの「学生におもねる教育に意味はあるか」「大学が学生の支配下に置かれぬか」といった詰問に遭遇し、改めてわが国における教育の常識に驚かされた」と述べている。
- 21) 「平成16年度国立大学法人岡山大学 年度計画」（[https://www.okayama-u.ac.jp/jp/pdf/nendo\(16\).pdf](https://www.okayama-u.ac.jp/jp/pdf/nendo(16).pdf)）（2021年9月10日）
- 22) 「審議事項（検討会）」『平成16年度第4回FD専門委員会 会議資料』所収。
- 23) 「国立大学方針岡山大学中期計画（平成16年度～平成21年度）」（[https://www.okayama-u.ac.jp/up_load_files/soumu-pdf/chuki_keikaku\(21.4.1\).pdf](https://www.okayama-u.ac.jp/up_load_files/soumu-pdf/chuki_keikaku(21.4.1).pdf)）（2021年9月10日）
- 24) 「学生発案型授業」（<https://www.iess.ccsv.okayama-u.ac.jp/hedi/stfd/hatsuan/>）（2021年9月10日）
- 25) 「平成19年度第8回学生・教職員教育改善委員会 議事要旨」岡山大学（2009）所収。
- 26) 「平成20年度第2回学生・教職員教育改善委員会 議事要旨」『平成20年度第3回学生・教職員教育改善委員会 会議資料』所収。
- 27) 「新授業創作に関する投票兼アンケートの結果について」『平成20年度第3回学生・教職員教育改善委員会 会議資料』所収。
- 28) 前掲25資料。
- 29) 「新授業創作の活動状況について」『平成20年度第4回学生・教職員教育改善委員会 会議資料』所収。
- 30) 前掲27資料。

- 31)「授業改善WGの活動状況について」『平成20年度第5回学生・教職員教育改善委員会 会議資料』所収。
- 32)「授業改善WGの活動状況について」『平成20年度第7回学生・教職員教育改善委員会 会議資料』所収。
- 33)「授業改善WGの活動状況について」『平成20年度第6回学生・教職員教育改善委員会 会議資料』所収。
- 34) 前掲30資料。
- 35) 岡山大学 (2009) 1頁。
- 36)「平成22年度第1回FD委員会 議事メモ」『平成22年度第2回FD委員会 会議資料』所収。
- 37)「平成28年度第1回学生・教職員教育改善部会議事要旨」『平成28年度第2回学生・教職員教育改善部会 会議資料』所収。
- 38)「学生・教職員教育改善部会の在り方について (案)」『平成30年度第4回FD専門委員会 会議資料』所収。
- 39)「第5回FD専門委員会 議事要旨」『平成30年度第6回FD専門委員会 会議資料』所収。
- 40)「全学教育推進委員会体制の見直し案 (2020/1/10) 版」『平成31年度第9回FD専門委員会 会議資料』所収。
- 41)「2019年度第8回全学教育推進委員会 議事要旨」『平成31年度第10回FD専門委員会 会議資料』所収。

toushin/000601.htm) (2021年9月10日)。

山内源・福田詔子・天野憲樹 2009.「インタビュー 学生と変える大学教育」『学生と変える大学教育』ナカニシヤ出版, pp.76-95.

(指導教員 福留東土教授)

【引用文献】

- 天野憲樹 2012.「学生・教職員教育改善専門委員会SweetFooD」木野茂編著『大学を変える, 学生を変える』ナカニシヤ出版, pp.105-126.
- 岡山大学 2009.『平成17年度 文部科学省 大学改革推進事業 特色ある大学教育支援プログラム (特色GP) 新機軸「学生参画」による教育改善システム 最終報告書』.
- 千葉喬三 2006.「学生参画による教育の共進化」『大学時報』310, pp.38-43.
- 中央教育審議会大学分科会 2021.『教育と研究を両輪とする高等教育の在り方について～教育研究機能の高度化を支える教職員と組織マネジメント～ (審議まとめ)』(https://www.mext.go.jp/content/20210302-koutou_01-1411360_00002_003.pdf) (2021年9月10日).
- 中里祐紀・清水亮 2012.「学生本音トークi*Seeをふりかえって」清水亮・橋本勝編著『学生・職員と創る大学教育』ナカニシヤ出版, pp.250-267.
- 中里祐紀 2013.「学生とFDの理想的な関係を模索する: より多くの学生がFDを楽しむために」清水亮・橋本勝編著『学生と楽しむ大学教育』ナカニシヤ出版, pp.294-311.
- 橋本勝 2002.「誰にとってのFDかー岡山大学学生・教員FD検討会がめざすものー」三尾忠男・吉田文編『FD (ファカルティ・ディベロップメント) が大学教育を変える』文葉社, pp.120-126.
- 橋本勝 2015.「学生参画型FDのあり方～その発展経緯と意義～」平成27年度全国大学教育研究センター等協議会資料.
- 橋本勝 2019.「学生参画型FDの現状と課題」, 令和元年度全国大学教育研究センター等協議会資料.
- 文部省高等教育局 2000.『大学における学生生活の充実方策について (報告) —学生の立場に立った大学づくりを目指して—』(https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/012/